



城

 はままつ
 第四十二回 浜松城

～若さゆえの過ちを認めた家康～

深草 祐一

昨年、ゆるキャラ®グランプリ2015が浜松で開催され、地元浜松市のイメージキャラクター「出世大名家康くん」がグランプリに輝きました。うなぎの鬚、みかんの紋付、そしてピアノ鍵盤柄の袴を履いた殿さまキャラは、その名のとおり徳川家康をモチーフにしたキャラクターです。そう、浜松は、徳川家康が17年の長きにわたり根拠としていたところ。今回は、苦い経験も重ねつつ力を蓄えた浜松城時代の徳川家康についてご紹介したいと思います。

岡崎城から浜松城へ

桶狭間の戦いを機に岡崎城で独立を果たした松平元康は、名を徳川家康と改め、三河の地歩を固めます。今川義元の跡を継いだ氏真の覇気のない性格を知っていた家康は、新進気鋭の織田信長と同盟して今川家に相対していきました。そして、武田信玄が今川家との同盟を破棄して駿河に攻め込むと、家康は駿府の館を追われた今川氏真を掛川城に攻め、ついに今川家を追い落として遠江を手中に収めました。さて、三河と遠江を領国とした家康にとって、駿河を手に入れた武田に対抗していくには、西三河の岡崎城では本拠が西に寄り過ぎていました。そこで、かつて遠江の国府があった見付（現在の磐田市）に城を築き始めます。しかし、なぜか途中で普請を取りやめ、浜松城を築いて本拠を移しました。この理由として、織田信長からの意見があったという説があります。これから武田との戦になりそうなのに、見付では天竜川が邪魔をして援軍が送れないのです。信長との同盟を頼りにせざるを得ない家康は、仕方なく一步引いて天竜川の西側の三方ヶ原台地東南端にあった曳馬城を改修し、浜松城を築いたというものです。ともあれ、家康は駿府城に移るま

での17年間、この地を根拠にして困難な時代を戦い抜いていきます。

三方ヶ原の戦い

浜松城に入った家康は信長との同盟を律儀に堅守しつつ、武田の圧力に対抗していました。しかし、武田信玄がついに動きます。將軍足利義昭の呼びかけにより信長包圍網が形成された状況をみて、戦国最強といわれた武田軍団を率いて遠江へ侵攻してきたのです。そして、三方ヶ原において戦となり、家康は生涯最大の敗北を喫することになります。この戦いの経過については様々な話が伝わっていますが、江戸時代以降の創作が多いようで、正確なところは分かりません。ですが、比較的信頼性の高い資料を総合して想像される物語を以下に紹介しましょう。

浜松城北方の二俣城を落した武田軍本隊2万5千は、天竜川を西へ渡河すると、かつて小天竜とも呼ばれた西側の支流（現在の馬込川付近）に沿って南下。いよいよ籠城戦かと、家康は浜松城で武田軍の動きを注視していました。ところが、武田軍は欠下というあたりで西へと進路を変えて三方ヶ原の台地へ登ると、追分から北へと進路をとり、浜松城を素通りする様子を見せます。浜松城では一瞬ほっとした雰囲気の流れましたが、家康は、屋敷の前を大勢で踏み通る者を咎めもせずに見送ってなるものかと激怒。織田の援軍3千を合わせた1万1千の軍勢で打って出ます。家康は、武田軍が三方ヶ原台地の北辺で祝田の坂を降りたところを後ろから逆落としに攻撃をかければ、半数以下の兵力でも勝ち目はあると考え、武田軍の後を追いました。ところが、日暮れ頃に武田軍に追いついてみると、武田信玄は、坂の手前に陣を敷いて待ち構えていたのです。おびき出さ

れたと分かっても既に後には引けません。家康は軍勢を横一線に展開させて鶴翼の陣に構えました。対する武田軍は二段目、三段目から次々と新手を繰り出せる重厚な魚鱗の陣で迫ります。そして、武田軍小山田信茂隊の投石攻撃から戦端が開かれ、激戦となりました。しかし、織田の援軍はさしたる活躍もできずに追い散らされ、徳川の三河勢は奮戦したものの、精強武田軍の圧倒的な兵力の前についに総崩れとなりました。家康はあわやというところまで追いつめられますが、忠義の家臣が次々と身代りになりつつ家康を逃しました。例えば、浜松城の留守居役を務めていた夏目次郎左衛門吉信は手勢を引き連れて駆けつけ、ここで討死すると言って聞かない家康を、馬の口取りに指示して逃れさせると、我こそは家康なりと叫びながら二十五騎を従えて敵陣に突入し討ち死にしたと伝わります(石碑の写真; 夏目漱石はその後裔にあたるそうです)。家康は三方ヶ原台地の東側の陰に隠れるようにして浜松城の元目口まで逃げ帰ったようで、散り散りになった他の家臣も少しずつ帰還してきました。ただ、勇将として名高い本多忠勝は台地上の道を整然と引き、残兵をまとめながら浜松城に帰還させて信玄を感心させたといひます。台地上を追撃してきた武田軍は、浜松城を見下ろす犀ヶ崖の手前で進軍を止めて野営に入りました。この時、このままでは終われない徳川軍が犀ヶ崖で夜襲をかけたという話が伝わりますが、残念ながら後世の創作との説が有力です。その夜、浜松城では、城門を開け放ち太鼓を叩いて暗闇の中逃げ帰ってくる敗残兵を收容していたようです。翌日、武田信玄は、籠城する構えの浜松城を攻めるよりも先へ進むべきと考え、軍勢を再度北へ向けました。その後、武田軍は三河の野田城を落としますが、信

玄は病を發し、甲斐へと帰陣する途中で没してしまいました。おかげで徳川家康も織田信長も最大の窮地を脱したのです。

三方ヶ原後の家康

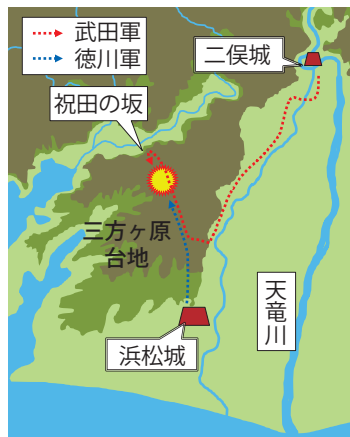
血気に逸って大敗を喫した家康は、後にこの時の情けない姿を絵師に描かせ、常に傍らに置いて自らの戒めとしたといわれています。「しかみ像」と呼ばれるその絵からは、若さゆえの過ちを痛烈に反省する家康の思いが感じられます。家康は、信玄の跡を継いだ武田勝頼が予想以上に戦上手であることを認めると、慎重に対応して機を待ち、織田信長の大军と共に満を持して臨んだ長篠の戦いにおいて武田軍を打ち破りました。その後も、起死回生の決戦を欲する武田勝頼の矛先を躲し続け、体力の尽きた武田家を、ついに滅亡へと追いやったのです。しかし、家康は亡き信玄公を尊敬し、武田家臣団の多くを召抱えました。そして、更に強大な軍団を擁する実力派大名へと成長していくのです。

その後の浜松城

本能寺の変、小牧・長久手の戦いを経て豊臣政権下に入った家康は駿府城へと移り、そして、北条征伐の後に関東へと移封されました。江戸時代に入ると、かつて家康の居城だった浜松城は譜代大名が配置される城となり、数々の大名が入れ替わり城主となります。そして、その多くが京都所司代や老中等の幕府の要職に抜擢されたことから、「出世城」として知られるようになりました。こうした歴史から、現在の浜松市は出世の街をアピールしており、出世大名家康君というキャラクターも生まれることになったということです。



夏目吉信の碑



三方ヶ原周辺図



信玄が本陣を置いたと伝わる辺りから見た現在の三方ヶ原。当時は広大な原野だった